

明徳短大歩き遍路体験学習に参加して

神戸大学生 田川 真希



特別宗教を持っていた訳ではない。幼いころ、祖母から「お米つぶにも、このお茶碗にも神様がいらっしゃるやで」と繰り返し聞かされ、何となくそうか

もしれないと思っっているくらいである。今回、明徳短大のお遍路講座に参加させていただいたのも宗教的な興味というより、四国という土地や文化に触れてみたかったからだ。

歩いてみると、私が想像した以上に自然が豊かだった。猿と出合ったり星がすくなくたくさん見えたり、生き生きとした緑や切なくなるほど美しい



明徳短大の歩き遍路体験学習

好意が支える遍路文化

金色の稲穂が風になびいていたり。日本人であることを神様に感謝したくなるような風景が、心にたくさん残っている。最御崎寺から下りてくるとき見えた海は広くて、青くて、「命を生み出した母」らしくゆつたりとしていた。「入った

想像超えた豊かな自然

い」と、何度も思った。文化面では、薄っぺらな私の知識で何かを言うわけにもいかなないので、歩く中であつたことだけにとどめようと思う。まず、お遍路さんの存在が広く受け入れられている

意的とは思っていなかった。道中で受けた様々なお接待は、歩き疲れた者にとって本当にありがたきものであった。冷たい飲み物やお菓子、あたたかい励ましの言葉……わざわざトラックから降りてミカンをくださった方もいた。小ぶりな

を美味しいと思ったことは、かつて無い。これほどたくさんの好意があるから、遍路という文化が今でも続いているのだと思う。「節談(ふしだん)説教」というものを聴かせていただいた。落語や漫談、境汚染。騒がれていても

は美味いと思ったことは、かつて無い。これほどたくさんの好意があるから、遍路という文化が今でも続いているのだと思う。「節談(ふしだん)説教」というものを聴かせていただいた。落語や漫談、境汚染。騒がれていても

知らないふりをする人、知らないまま汚染してしまふ人。知らないことが取り返しつかない事態を引き起こしたとき、誰も責任は取れない。全てを知ることが無理だが、できる限り知っておきたい——そんな気持ちだった。合流するまでは知らない人たちの間でうまくやっていけるんだろうかと、不安もあった。途中で、引き返したいと思ひもした。でも、参加できて本当に良かったと思ひている。会えないはずの人に会え、その人たちのことを大切に思えるならそれだけでも参加した価値はある、と。歩いているときは大変だと感じることも多々あつたのに、こうして日常に戻つてくると、思い出すのは笑顔や笑い声ばかりである。どの顔を思い出しても「感謝」の一言だ。

(芦屋市前田町)



平等寺山門を出発する明徳短大生 (右から2人目が田川さん)